研修概要（久保田篤）

2018 年度長期研修（国内）においては、近世の仮名遣いに関して新しい見方を提示し多くの研究者の賛同を得た屋名池誠氏（慶応義塾大学文学部教授）に「表記システム」等についての考え方を学びつつ、これまで研究を行ってきた近世の仮名遣いや仮名字体使用の実態を改めて見直すとともに、明治期以降の現代日本語における文字・表記の実態との繋がりも考察した。また、近世に数多く著された仮名遣書のうち、活用を根拠にする点や規則書形式である点など、後の時期のものに比べて顕著な特徴点を多く有する、近世初期から中期にかけての幾つかの文献を調査し、諸本の考察や記述内容の分析等を行った。

前期は、平仮名字体と仮名遣いの研究を進めた。仮名遣いについては、屋名池氏の論文等を再検討したり、「多表記性表記システム」である近世通行表記の成立に関する氏の新しい研究内容を学んだりしながら、主に近世後期の戯作・随筆・実用書等の表記の調査・考察を行った。その研究内容の一部は、他大学の教員（法政大学・国学院大学・聖心女子大学など）数名と年２回ほど開催している小研究会において披露した。屋名池氏の指摘が基本的には首肯できる点を確認できた上に、氏の研究に関する疑問点や訂正すべき点も見出すことができ、有益であった。

平仮名字体の使用実態については、近世に常用された字体が、明治期以降、特に昭和期の現代語において、どのように残存したか、作家の葉書を資料にして研究を行った。その研究内容は、６月に白百合女子大学で開催された近代語学会（平成 30 年度第１回研究発表会）において発表した。かなり多くの資料を丹念に調査・検討したということもあり、発表された研究結果は確実なものであろう、また残存した変体仮名は他の種類の資料においても概ね当てはまると見られ今回の研究結果は普遍性のあるものであろうという、好評を得ることができた。なお、明治期以降の仮名表記に関しては、以上の変体仮名使用実態だけでなく、仮名文字論についても少し検討を行った。

後期は、引き続き仮名遣いの研究を行うとともに、あまり研究の進んでいない近世前期の仮名遣書の調査を行った。仮名遣いの実態については、以前に研究した近世初期の文学作品の再検討や更なる深い追究をしたほか、近世後期の考察においては音を限定した調査やジャンル別の検討などを行ったりした。これらの内容は、編集・執筆の依頼を受けた近世日本語のテキスト（朝倉書店より刊行予定）の一部等としてまとめる予定である。

仮名遣書については、近世前期の著作を中心に、伝本の調査・考察を行った。仮名遣書の所蔵場所はある程度限られるが、最も多く所蔵しているのは東京大学国語研究室である。そのため東京大学を多く訪問し、数多い仮名遣書の一部を研究した。うち数点に関しては、ちょうど東京大学国語研究室資料叢書（汲古書院より刊行中）の『仮名遣伝書集』が刊行予定となり、解説の執筆を依頼されたので、今回の研究内容を種々書き加えることにしている。また、国文学研究資料館には諸大学・諸図書館等所蔵の仮名遣書のマイクロフィルムがあり、それらの複写を多く依頼して研究資料とすることができた。